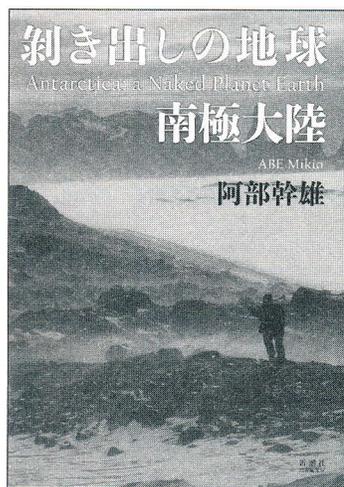


2

007年から3年間、南極のセール・ロンダーネホ地に南極観測隊の中から

地学調査隊が派遣された。著者はフィールドアシスタントとしてこの調査隊に同行し、装備、食糧、安全面で研究者たちを支えた。日本の南極観測史上はじめて、隊員と物資を飛行機で輸送し、隊員は基地に滞在せずテントで暮らし、移動はスノーモービルと徒歩だけ。夏が終わる2月中旬までの3カ月間の地質調査は、それ自体が探検だ。本書はその様子を収めた写真集である。

本書の写真群は、雪原やペンギン、オーロラといったパターン化された南極模様だけでなく、山地の未踏の稜線を隊員の一人が行く姿や、さまざまな文様が岩の大地に刻まれる様、岩の下で卵を抱くユキドリと、南極大陸の新しい側面を伝える。同時に、ハンマーを振るう隊員の様子や、手の込んだ料理までフリーズドライにして開発した「南極野外食」が見開き写真で表現される。それを撮影する隊員、テント内で談笑する団らんのひととき……飾り気のな

剥き出しの地球
南極大陸

阿部幹雄 著

B5判・104ページ 2835円
新潮社 <http://www.shinchosha.co.jp/order/910000>

い写真で、人を寄せ付けない自然の中で行われた踏査とそこでの生活のありさまをぼくたちは知る。

一昨年、東京に南極・北極科学館ができた。南極越冬隊の歴史や成果、この踏査の展示もあり、拾った隕石やオーロラすらすらプラネタリウム風に見られ、その規模の大きさとともに南極と越冬隊の知識を得ることができる。越冬隊の派遣は、研究展示施設の大きさを見れば、大規模な国家事業だというのがあらためてわかる。

しかし、出身国は持っているも基地を出てしまえば、地球の上の南極という以外に自分の位置づけを示すものは意味をなさない。「地球上、

が面前で転落して亡くなる中、1人だけ稜線に取り残されるという経験を著者はした。その遺体捜索を長年続けた。南極に筆者を誘った本吉洋一教授は、著者を誘ったその理由を「もし事故が起きたとしても、阿部さんがいれば、何とかしてくれると信じていました」と後日語った。

人と地球とのつながりを探る旅は救援を呼ぶのも困難で、クレバス転落の危険もある。それを支える中で、著者は南極の大地と調査の様子を「地球を叩いて対話する人」「億の時間単位」「地球の探検」といったキャプションでも表現する。隕石の収拾では、宇宙とのつながりまでも感じられる。調査隊への参加は極地探検が少年のころの夢であった著者の夢の実現であり、著者が「剥き出しの大地」とつながりながら、自身の立ち位置を探る旅だったのかも知れない。著者の撮影した写真の背後にある眼差しから感じられるのは、やさしさである。それは、東京の科学館の展示室をいくら見ても嗅ぐことができない、「匂い」のようなものかも知れない。

唯一国境が存在しない南極大陸では、なぜか出会うひとはみんな他人に対してきわめて優しい」と著者は言う。そこでの調査は自身と地球の結びつきを直接意識する試みに必然的になるのだろうか。自分はちっぽけな存在であることを自覚しながら、彷徨っているのではなく、たしかに位置づけを求めて厳しい自然の中に入る。

「南極では生きることができないのです。そのため私は自然に従順に生きるしかない、私の力など自然に対してははかないものだと思わしかありませんでした」といった表現を著者は随所で述べる。1980年に中国ミニヤ・コング登山で下山中、8人